か，角屋先生には河川の方でもこれ以上の雨が降れば大変なんだということを言えるのか，言えないのか，安全ではないという事を言うことが大事ではないか，そのうえで治水政策を進めていった方が良いのではないか．

光田：都市の中で問題となるのは平均的に一番強いのがどうかといった事以外に，特定の障害物があるために，後ろに乱れができ，それによって次の建物に影響がでる，また，風が弱くなっても建物が振動する．このような場合に今のところ破壊するところまではいかないが，それによって機能が害されることはあり得る，たとえばホテル等で風の揺れのため泊っている人が起きる，それでは困る訳で，こわれないけど，機能が害されることがあるので性能向上のための風の問題を考えなければならない．

全体を締め括って

座長：最後に予報が当たる当たらない問題について，住民に気象台からどのような情報を流すのが最も適切であるかを股野さんに締括りをお願いします．

股野：どのような情報を住民に提供すれば一番良いかを，これからの複雑な社会の中で考えていこうと今日話した訳で，的確に予報を当てることと，ニーズが多様化しているので多勢の目的に合ったようなものにするのは大変難しい．このような意味でこれからどのようにしていけば良いのか，つまり今までのようにマクロ的な気象情報，天気予報では無理だが，だからといって情報処理が容易になったからといって情報過多では混乱する．どこかで気象庁の役割分担といいますか，どこまでを気象庁がやって，またどこからはそれぞれの特有の目的でやるのか，そのような分界点をある程度学問的な裏付けの中でやっていきたいというのが私の提案した根本です．

（なお，この記録は討論の内容をそのまま載せたものです）

会員の広場

「天気」を面白くするための二，三の提案

嶋村　克*

「天気」購読者数拡大への努力は，いまや学会活動と気象学発展のための最重要課題の一つとなった．そのための方策はいろいろあろうが，何よりも必要なのは，「天気」が面白いことであろう．人にはみな（特に若き日に）次の発行日を指おり数えて待った雑誌があるものである．読者をして「天気」発行日を指おり数えさせる条件は何か．

マスコミ出版界でご活躍中の倉嶋厚氏は，ある講演会で次のように述べておられる．

人々（視聴者や読者）が面白いと感ずる番組や書物は，少くとも次の内のいずれかの条件を備えているものである．すなわち，

(1) 対象としている事実そのものが面白い．

(2) 対象としている事実はほぼ既知のものであるが，その分析の仕方（すなわち示された「切り口」）が斬新で面白い．

(3) 対象としている事実は6・7割がたわかっているが，いまひとつすっきりしなかったのが，その説明によってハッキリ判ったと感じさせる（理解できた！　という快感を味わわせる）ことができる．

さらにすべてに共通する条件として，膨大な資料や事実の不要な部分を削りに削って，最後に残ったもののみをズバリと述べてあることである．倉嶋氏はこれを「削りの美学」と呼ぶ．

上記条件の(3)に関し，筆者に今でも鮮明な次の経験

* Masaru Shimamura，気象庁予報課．

がある．予報の仕事を始めて間もなく，岸保勘三郎博士の「数値予報新講」（地人書館）が出た．一気に読了し，「面白かった」と久しぶりに感じたものである．何が「面白かった」のか．数値予報（と傾圧波）の基本がわかった！ という快感以外の何ものでもなかった．簡単な数式を使った，淡々とした語り口であり，学術的斬新さや修辞学的技巧を求められる種類の書物ではない．それでいて読者をこれだけ「面白がらせる」ことができるのかと感じ入ったものである．これ以来岸保先生のこの種の解説を読んで失望したことがない．

筆者の強調したい第一点は，このような「理解の快感」を読者に与ええる解説を努めて「天気」に掲載することである．特に解説の名手達に連載型式の解説シリーズをお願いしたい．また内容は最新のトピックである必要はない．

ただ大切なのは，「理解の快感」は昨今氾濫しているいわゆる「口当たりのよい」書物からは得られない点である．「天気」の読者にはやはりある程度の学的レベルが要求されて然るべきであり，この種の解説でも，山中大学氏（本誌32巻8号418頁）の言われるように，アマチュア対象でなくプロ対象であるべきである．また読者にやや小高い丘を登らせることは是非必要である．

また山中氏の説のように，「天気」連載の解説の合刷も有用である．雑誌成功のカギの一つが，面白い連載ものにあることは，昔も今も変わりはない．雑誌編集の別のノウハウとしては，特集の企画があるが，紙数制限の厳しい「天気」では各号毎に特集は組みにくい．連載形式の特集に活路がありそうである．

紙数制限に関連し，次の指摘もしてみたい．すなわち「天気」編集の客観的状況である厳しい紙数制限は，倉嶋氏の「削りの美学」を生む天恵と考えるべきである．たとえば論文推敲の要諦はこの「削りの美学」であることは常識である．論文を提出する学会員各位も「削りの美学」溢れる，魅力ある「天気」にするために協力すべきであろう．

倉嶋氏の「斬新な切り口」の良さを生む一方法として座談会形式があるのではないか．雑誌がよくこの形式を用いる理由のひとつは，各界の専門家に自由に語らせることによって，原稿用紙に向かっていては出てこない新しい角度からの視点を引きだそうとするからではなかろうか．また最近座談会出席者として，各界ともに新進気鋭の人々が選ばれる傾向がみられ，それが「斬新な切口」を提供できる一因となっているようである．差し当たり大会期間中に現在のシンポジウムより自由に参加・発言できる若手中心の談話会を開いて，その内容を載せるとか，「気研ノート」編集委員会の討論内容を略記するとかいったところから始めたらいかがであろうか．「切り口」は別としても，血の通った雑誌にする効果はあるかも知れない．

最後に一つの提案をしたい．この「会員の広場」欄をしばらくの間，「天気」を面白くするための学会員各位の提案の場としたらいかがなものであろう．

新規口絵の連載について

昭和54年より“「ひまわり」の画像から”が，本誌口絵を使った気象衛星シリーズとしてスタートしました．好評のうちに，昭和57年より“宇宙から見た気象”へと発展し，来月号から新しいシリーズ“日々の衛星画像”になります．これは，「ひまわり」の赤外による全球画像を毎日，1カ月にわたって掲載（4ページ）するもので，会員の皆様の研究などの一助となることと思います．

（編集委員会）